

## G.Green における「アンガージュマン（参加）」の問題

（その 2）

——小説 *The Comedians* を中心として——

新 井 章 慶

### On the Subject of “Engagement” in G. Greene’s Works

——With Special Reference to *The Comedians*——

AKIYOSHI ARAI

〔Ⅱ〕

他の不幸を取りさるための、善意ある アンガージュマンが、往々逆に また 新しい不幸を生む。この人生の矛盾を、作者は *The Heart of the Matter* と *A Quiet American* の中で我々の前に息ぐるしいほどにさらけ出してきた。そのアンガージュマンが人間的であればあるほど害も大きくなるのである。必要悪と言って片づけてしまうのが政治的精神かも知れないが、グリーン人間は、“凡ての人々を自分自身の子供であるかのように愛さなくてはならないのである。”（*The Power and the Glory*）少なくとも、そうなりえない事が彼のひそかな悩みなのである。このような絶対への探求は、もはや人間的でもなければ实际的でもないように見えるかもしれない。そのような人間を、グリーンは彼の小説で初めて、最も現実的な、偽善と権力欲に黒く彩られたハイチという社会的不正の中にアンガージュさせたのである。Smith 氏は、故あって菜食主義の熱烈な提唱者である。彼は休暇を利用して、この政情不安定な黒人共和国に菜食主義普及のためにやってくる。彼は、かつて同主義を標榜して、米国大統領に立候補し落選した人である。風貌は、素朴な詩人か田舎大学の学部長といった感じで、決して政治家タイプの人ではない。髪に白いものをまじえ、目の青く澄んだ Smith 氏は、古びたレインコートを着て、およそ世の中を、小ざかしい知恵才覚で渡るコメディアン風ぜいとは好対照の人物である。みづからコメディアンたることをもって任ずる「私」は、船室のドアを排して入ってくる Smith を見てこう思う、“もし世の中に純粋な本物があるとしたら、彼こそそれだ”と。彼は船中の黒人フェルナンデスの悩みにも敏感な同情といたわりを示す。上陸してからも万事そんな調子の Smith であるが、「私」も、同類のコメディアン Jones も彼に対しては嫌味を感じない。彼は内に使命感を固く蔵しているが、決してポーズをとったりしない。“もし私が彼の前で誰かの悪口を言う——たとえ、それが赤の他人であろうと、敵であろうと、彼はひどく落ちつかなかった。

さて、Smith の思想について、「私」との対話の形のまゝで、こゝに引用しよう。一見変わったことを言う彼のコトバに対する「私」の反応のしかたについても我々は注目したい。これは Smith に対する作者自身の共感と読みとれるからである。

- (1) 'Vegetarianism isn't only a question of diet, Mr Brown. It touches life at many points. If we really eliminated acidity from the human body we would eliminate passion.'

'Then the world would stop.'

He reproved me gently, 'I didn't say love', and I felt a curious sense of shame. Cynicism is cheap—you can buy it at any Monoprix store—it's built into all poor-quality goods.

'Anyway you're on the way to a vegetarian country,' I said.

'How do you mean, Mr Brown?'

'Ninety-five per cent of the people can't afford meat or fish or eggs.'

'But hasn't it occurred to you, Mr Brown, that it isn't the poor who make the trouble in the world? Wars are made by politicians, by capitalists, by intellectuals, by bureaucrats, by Wall Street bosses or Communist bosses—they are none of them made by the poor.'

'And the rich and powerful aren't vegetarian, I suppose?'

'No sir. Not usually.' Again I felt ashamed of my cynicism. I could believe for a moment, as I looked at those pale blue eyes, unflinching and undoubting, that perhaps he had a point.

(こゝで Smith の言う passion とは激しい敵がい心や憎悪の感情のことであろう。)

....ついで船中昼食の席で話題が戦争回顧談におよび話に花が咲いたとき、

- (2) 'It's a terrible thing,' Mr Smith said, pushing away what was left of his cutlet—a nut-cutlet, of course, specially prepared, 'that so much courage and skill can be spent in killing our fellow-men.'

'As Presidential Candidate,' Mrs Smith said, 'my husband had the support of *conscientious objectors* throughout the state.'

'Were none of them meat-eaters?' and it was the turn now of Mrs Smith to regard me with disappointment.

'No laughing matter,' she said.

'It's a fair question, dear,' Mr Smith gently reproved her. 'But it isn't so strange, Mr Brown, when you think of it, that *vegetarianism and conscientious objection* should go together. I was telling you the other day about acidity and what effect it has on the passions. Eliminate acidity and you give a kind of elbow-room to the conscience. And the conscience, well it wants to grow and grow and grow. So one day you refuse to

have an innocent animal butchered for your pleasure, and the next—it takes you by surprise, perhaps, but you turn away in horror from killing a fellow-man. And then comes the colour question and Cuba.....'（イタリックは筆者）

（※ conscientious objector いわゆる人道主義的立場からの戦争参加拒否者）

筆者には Smith という「菜食主義者」がグリーン作品に初登場したということは、彼の単なる小説家的思いつきではないように思われる。幼ない子供や卑しめられる弱者への鋭い「あわれみ」の心は、彼の諸作品をながれる生きた血液であった。殊に、この小説のすぐ手前の作品「The Burnt-Out Case」にこういう言葉がある。「彼は、まるで人間だけが自然死をとげる権利があるかのように、生きものを片っぱしから殺りくすることに情熱をかたむけた」〔ついでにその「彼」がカトリックの神父であることも皮肉だ〕菜食主義者 Smith は生まれるべくして生れたと筆者には思われる。

（話題をもどす）（上記英文に続いて）その時、自分の勇ましい戦争手柄話に冷水をかけられた気がして、いささか腹のたった、ある男が Smith に反問する「自分には、平和主義者というのが分りませんね。あなた方は、自分達のような人間に甘んじて守られているじゃありませんか」すると Smith は「あなた方が私たちの意見をきいてくれないからです」と柔らく相手をたしなめる。「でも良心的戦争参加拒否者と責任回避者との区別はむづかしいですからね」すると Smith は答える「すくなくとも彼等（前者）は監獄を回避しません」相手は、かん高い声になって、なおも食いさがる「それでは、もし誰かがですよ、あなたの奥さんに襲いかかったとしたら、あなたはどうしますか」それに対して、Smith は「まじめに力をこめて」こう答える「私は酸性を取りのぞいたら、憎悪心が全部なくなるとは申ししていません。もし家内が襲われて、その時私の手にナイフがあったなら、私はあるいはそれを使うかもしれません。私たちも自分の理想どおりやれないときがあるのです。」…「でも」と彼はつけ加える「でも、後で私は自分の憎悪心が悲しくなるでしょう。それを後悔するでしょう」此処には、あの A Quiet American のパイルの持つような偽善からまぬがれた理想主義者 Smith の人が、よく描出されている。

後になって、Smith 夫妻は、政府から自殺に追いこまれた黒人フィリポの未亡人のために身の危険もかえりみず、援助の手をさしのべる。その事で政府側から誤解を受ければ、菜食主義センター建設のことはダメになるだろう。それでもいいのである。ついで彼らはフィリポ葬式の現場で、秘密警察の暴虐ぶりを目のあたりに見、Smith 夫人も侮辱的な突きとばされ方をする。しかし後で、夫人は「たゞ押されただけですよ」と言う。一方 Smith はこの事件で、今まで黒人たちに強い愛情を寄せていただけに、彼の幻滅感はひどいものであったが、彼は本国への通信に、故意にこの事件のことは省く。「こんな記事をのせれば、本国には、人種問題で憎悪心をあおろうと待ち構えて、それを利用する人たちがいる」からである。しかし、その後も Smith は政府の陰險な弾圧をいろいろ耳にする。街のある場所には乞食と不具者がうずまいている。

しかし彼の菜食主義運動の熱意は減じない。センター建設を大臣に訴えかける Smith の話を「私」は面くらいいながら聞く、そして思う「彼の夢は不敗である。現実には彼に触れることができない。あの郵便局での光景でさえ彼のビジョンを傷つけなかった。間もなく酸性と貧困と憎悪から解放されて、植物性カツレツを幸福そうに食べているハイチ人を彼は夢みているのだろう。」Smith は大臣に具体的なプランをこまごまと語る。そして政策は、つねにバーナード・ショーのいき方に従うと言う。(ちなみに、B. Shaw は階級闘争によらない、漸進的社会主义団体フェビアン協会の創設者の一人。彼は、一生菜食主義を実行した) 大臣は、センター建設に協力しようと約する。勿論それは大臣の狡猾なタクラミからであった。大臣との敷地調査の帰り、さすが Smith も相手の醜い下心を感じて、すっかり興奮めプラン撤回を宣言しようとする。しかし、その時の Smith の反省のしかたは、彼の底ぬけな善意をもっとも端的に物語っている。「一時間以上の憂うつな沈黙のあとで、彼は自分の辛らつな裁き心を改めはじめた。ひょっとしたら自分は不当に相手を疑っていたのかも知れない。そんな考えが彼を悩ませた。」そして彼はもう一度あたってみようと心にきめる。しかし決定的なときがくる。センター建設にさいして、貧しい労働者たちからまで搾取しようとする大臣の底意が暴露したのである。加えて Smith の心を衝撃したのは政府のある残忍行為であった。警察を襲撃したゲリラ隊への報復として、彼らは捕虜二人を公衆の面前で銃殺する。その光景を小学生全員に見せ、テレビにまで流した。ついに Smith は自分の計画が此処ではまだ熟していないことを思い知らされる。「あんなに熱烈に凡ての人間の誠実を信ずるということは、ひょっとしたら性格の欠陥かもしれない」とさえ「私」に思わせた Smith である。その彼がこゝで打ちのめされるのである。この場面は、全篇中の重要な山である。山というよりは、作者グリーンの魂の息づきが我々に迫ってくる。「見あげる彼の老いた青い目に涙があった。彼は言う。「私は思っても見なかったよ.... 本国で私らが黒人差別反対運動をしていたとき...」「あなた、黒人を責めることはできませんよ」と妻がいう。「分ってる。分ってる」つねに「憎悪の敵」である Smith 夫妻のこのやりとりは、まさに彼らを彷彿たらしめる。夫と一心同体である妻は、また言う「私たちは生きて学ぶのです。これが最後ではありませんわ」...そして Smith と「私」との会話：

'I'm sorry about the centre. But you know, Mr Smith, it would never have done.'

'I realize that now. Perhaps we seem rather comic figures to you, Mr Brown.'

'Not comic,' I said with sincerity, 'heroic.'

'Oh, we're not made at all in that mould. I'll say good night to you, Mr Brown, now, if you'll excuse me. I'm feeling kind of exhausted this evening.'

'It was very hot and damp in the city,' Mrs Smith explained, and she touched his hair again *as though she were touching some tissue of great value.* (イタリックは筆者)

この二つの下線部は注目し、すなわち「私」のこのコトバに、いささかでも人は皮肉を感じるだろうか。ついさっき迄「(人がどう殺されようが) 僕たちの知ったことでない」と銃声のそばで情事にふけていた「私」である。その「私」の虚しい目に、真の人間のすがた

が映ったのはこの時だけではなかったろうか。もっとハッキリ言えば、それは“死をもって誠実を証した”あの Magiot でもなければゲリラ隊でもなかった。それは、一見こっけいな程に現実離れた（と見える）Smith の絶望する姿であった。とくに上記引用文は、この長編中にハメこまれた、最も美しい宝石である。筆者は、The Power and the Glory の中で、ガタガタ震えながら処刑される司祭の描写を思いだす。（前論文） また“The Heart of the Matter”の Scobie, “The Burnt-Out Case”の Querry, 彼らの現実への参加 involvement はすべて、たあひなく挫折していく。崩れるべくして崩れていく彼らの途方もない「善意」と「純粹」さ。それを人は、滑稽とうらおもての崇高さと言うかも知れない。こゝは、正にそれと軌を一にした Smith のこっけいさである。しかし、それを「私」は心から heroic だと言っている。“スミス夫人は、ふたたび夫の髪毛に手をやった、まるで高価な薄織物にでもさわるかのように”この、いたわりと尊敬をこめた夫人の手は作家グリーンの手ではなかったろうか。

このようにして Smith はハイチを去っていく。（彼は休暇を利用してハイチに来た）しかし彼らは“生きて学ぶ。これは終りではない” 彼らは帰途、隣国のドミニカに寄り、其処で菜食主義の運動をつづける。「私」が彼からお世話になったという手紙を受けとったとき、「私」の心に去来した感慨をこゝに引用しよう。

and suddenly I realized how much I missed him. In the school-chapel at Monte Carlo we prayed every Sunday, ‘Dona nobis pacem,’ but I doubt whether that prayer was answered for many in the life that followed. Mr Smith had no need to pray for peace. He had been born with peace in his heart instead of the splinter of ice.

また、あとになって、「私」は Smith がホテルのベッドに置いていった“菜食主義案内書”を見つけて、それを開いてみる。そこに Smith のきれいな筆蹟で書かれた献辞を読んだときの「私」の感慨。

I envied his assurance, yes and the purity of his intention too. The capital initials gave the same impression as a Gideon Bible.

ハイチで理想主義者の悲哀を見た「私」は、それ故に敗北者のイメージを彼から刻みつけられはしなかったのである。それどころか、肉身の Smith が去っていったあと、気がついてみたら「私」の内に“ギデオン聖書のように”確信と安らぎにみちた、ある人間の像が遺されていた。これが重要である。コトバを変えて言えば、作者は、初めから敗北と分っているような一人の理想主義者の顔に敗北のらく印を押して描いていないのである。みじめな挫折の主題に、＜勝利＞のトーンをひそかに用意すること。これがグリーン文学の不変の道すじではなからうか。彼の新しい短篇集に、こういうのがある。地球のはらわた（地下内部）に一組の醜悪きわまる老夫婦が住んでいて、彼らは地上に、この上なく美しい一人娘を生みだしている。そのことを主人公がきいて、ぜひともその美しい娘をさがしだそうと憧れどこちにとらえられ

る。そんな幻想的物語がある。筆者は、この短篇“Under the Garden”にグリーン精神の原型をみる思いがする。けっきょく彼の諸作品は、すべて、このような内奥精神のつむぎ出したバリエーションではなかろうか。醜悪な現実のはらわたに、一つぶの種子が宿っている。人はそれを夢とよぶが、これこそ不滅のキラメキを持つ Reality である。いわゆる現実、それを取り巻いて、それを光あらしめるに役だつ広大な仮象の暗闇にすぎない。存在の本質とよんでもいい、この Reality を見つめる者のみが真の善意のひとであり、真の平和のひとでありうる（グリーンのアウグスティニズムは諸研究家の指摘するところ。しかも善悪に関するアウグスティヌスの神学は、新プラトン主義の影響による。すなわち悪は積極的な存在ではなく、単に善の欠如にすぎない。それは無である）Smith はハイチを追いつめられたが、また現われるはずである。一切の人々から憎悪を消して善意を実現するために。そんな風に、これは描かれている。ちょうど“The Power and the Glory”の司祭は射殺されたが、いつの間にかもう一人の新しい司祭が現われたようにである。司祭は射殺される前に無神論者の隊長に言った「どんなに革命をしても、善い人がいなければ、もともくあみです」と。



サルトルの代表作に「神と悪魔」がある。これは彼の“アンガージュマン”の哲学を人間の極限状況において劇化したものである。その中で、首領ゲッツは、自国の民がキリスト教的無抵抗の愛のために全滅するのを見る。

そのとき彼は思う「不在が神だ。沈黙が神だ。天国も地獄もない。あるのは地上のみだ。おれは、純粋の愛を求めた。愚の骨頂だ。愛し合うということは、自分らの共同の敵を憎むことだ。おれは善良であるために悪人であらねばならぬ」（生島遼一氏訳の要約）このようにしてゲッツは彼の指導をこぼむ者を立ちどころに殺して農民解放の戦争を展開する、自ら「屠殺者と死刑執行人たること」を自覚して。

こゝではサルトルの“実存に先立つ本質の否定”が主張されている、すなわち肉体としての人間存在のかた、あるいはその内側に立つ永遠なる絶対善の否定である。この本質を否定するとき、“純粋なる愛は愚の骨頂となり、”自己防衛あるいは自己拡大の passion が生の原動力となり、ただけしい参加の形式が決定される。すなわち人間の自由のための、本来、誠実なるアンガージュマンに憎悪や敵意の火が燃える。（“善悪は不可分離のものである”というサルトルの実存的な条理の認識が、その現象把握の客観性にもかかわらず袋小路の様相を呈するのは、“本質否定”の宿命的帰結であると筆者は考える〔サルトル“実存主義はヒューマニズムである”参照〕）

一方、「悪霊」（ドストエフスキー）の、転心後のトロフィモヴィッチや「白痴」のムッシュキンが Smith の姿を思わせる。彼らは対立と闘争の世界を愚かしい愛のすがたをして歩く。彼らは、一人の悪しき者の不幸にも心動かされる人間である。ドミニカで運動を続ける Smith は、かげで同胞の米人から「少し、いかれている」と笑われる。そのとき「私」は“この笑う人間とスミスとの間に途方もない隔りを感じる”のである。



以上試みてきた “The Comedians” の分析をこう要約しよう。この小説では “A Quiet American” の主人公 Fowler が三つの人物に分化している。

すなわち Fowler という一人の人間の内部に葛藤し矛盾し合った三つの想念が、三種類のタイプの人間となって具象化している。すなわち、愛欲と打算に没入するタイプ。他人の悪と不幸を黙視するに忍びず暴力にコミットする型。暴力では、けっきょく解決できないものがあることを悟った人間のタイプである。従来 *obsession* という言葉で特色づけられたグリーン小説のナゾ的な心理のもつれが、ここでは暗い舞台装置にもかかわらず一応すっきりした感を与えるのは、このことに起因するのであろう。義憤に駆られて友人パイルを殺した後、Fowler の心に芽生えた、ある根源的な悩み（前論文既出）が、ここでは Smith という人物で解決された形になっている。どうであれ作家グリーンが追求してきたものは、この地上的肉身の生だけでもなかったしそれを超えた霊的実存の生だけでもなかった。後者が一人の人間によって全うされるためには、それだけ前者の生き方が重視されねばならない。それは現実への積極的な参加を要求する。“汝、殺すべからず” の神のおきてを怯懦から出た不参加の口実として使っては問題外である。

しかし、それはサルトル流のアンガージュマンとは明らかに異質のものである。1948年作者グリーンは、E. Bowen と V. S. Pritchett にあてた手紙のなかでこう書いている。

“まず私は言いたいのです。私には街の八百屋さんや事務員とおなじく負わなくてはならない、人間として共通の義務があります。それは、私に家族があるなら、家族を養うということ。貧しい人、未亡人、あるいは孤児から奪わないこと。そしてまた、もし当局者が要求するなら、私には死ぬ義務（筆者註・処刑を甘受すること）があります（これは、私が主体性を維持するための唯一の道です。*Conscientious objector* は、自己の正しさを証するためには、嫌でも（人間）の教師とならざるをえません）以上は、私たち人間としての基本的な義務です。……もし私たちが、これらの義務を果さなければ、私たちは、それだけ人間でなくなるのです、従ってそれだけ芸術家でもなくなるのです……” (G. Greene by A. A. Devitis) (下線筆者)

### 〔結 語〕

筆者は、小説 “The Comedians” のなかに響くライトモチーフ（示導動機）中、最も重要なものは菜食主義者 Smith の 生き方であるとして、それを論じてきた。それならと、ある人は異論をはさむかも知れない。すなわち、この陰惨な「悪」をめぐるの、様々な人間ドラマを完結するのに Magiot の遺書および Jones 最期の光景（「私」のゆめ）をもってしたのはどういう訳か。Smith の静かさに較べて、これらは余りに印象的でありすぎはしないかと。実際、Smith は、これらよりも早く画面から溶暗してしまっているからである。

しかし、一見いつになく明快なプロットをもって書いたと思われるグリーン文学が、その多義性（ambiguity）の特質を発揮するのは、まさに此处においてである。

政治的参加に身を殉じた唯物論者 Magiot は、遺書のなかで、 Kommunismus の理念に底流している “ある神秘的なもの” を感じとっている。彼は、“それは、別の仮面をつけた、カトリシズムと同一の信仰かも知れません” とさえ言う。“カトリックもコミュニスト達も大きな罪を犯し

てきました、しかし少なくとも両者は悪を傍観したり無関心であったりはしませんでした...”  
 此処には、すでに、いわゆる必要悪への冷然たる肯定というよりは、“自らの手を血ぬらす”罪の痛みがひそかに疼いていないだろうか。この点において、平和と善意の人 Smith は、コミュニスト Magiot と断絶したところに立っていないのである。「義」の人 Magiot の遺書の全行間には、もう一人の Magiot が別の何かを書き加えようともがいているかのようなのである、それは、ついに言葉とはならなかったが、二者択一の道を超えた、あるアンガージュマンへの跳躍（超合理的と言ってもいい）がすでに予感されている。Smith は、Magiot の対極者ではないのである。現に Magiot はこう言っている。“あなたは、あの夜、スミス夫人が私をマルクス主義者だと言って非難したのを覚えていますか。‘非難した’と言うのは少し言葉がきつすぎます。あの人は、不正を憎む親切な夫人です”と。（ちなみに、スミス夫人はスミス氏と言いかえても同じである）  
 章の初めにおいて、あの敗れたゲリラ隊の行為を賞賛した司祭の説教を聞いて、Smith は“悲しげに首をふった。”それは、“政治家がどんな名目をたてようと、いかなる戦争にも反対である”彼の否定の表明であったとしても、悪にたいする人間的な怒りへの無理解の表明では決してなかった。（彼自身がハイチで、その悪に涙をのんだ）、人間 Magiot の怒りと悲しみは、Smith にはすべて自分自身のそれとして共感された。だから、Smith のほうはいくらか早く溶暗させておいて、暴力革命にアンガージュした Magiot のほうに充分語らせる。筆者は、このような小説の手法に、作者グリーンのゆとりさえ感ずる。“The Power and the Glory”から“A Quiet American”を経て、長く苦渋にみちて追求しつづけた最も大切な、ある人間像が、“The Comedians”に至って、ようやくハッキリした輪郭をとり始めた。しかし、それにあまり多くを語らせてはならない。“完全な真理は嘘に見える。それが本当らしくひびくためには、多少の嘘を混入せねばならぬ”（ドストエフスキー「悪霊」）このようにして、Smith には最後の章の初めにおいて、たった一回だけ、最も意味深い行為を、影絵のようにして与える。あとは多少の嘘をまじえた真実を充分に描くこと。“あと”とは Magiot および喜劇役者「私」と Jones である。そんなふうに作者グリーンは構想したのではなかろうか。コミュニスト Magiot の言葉には真実がある、そしていくらかの嘘がある。それが、かえって我々の胸にこたえるのである。そのような描き方をすることができた作者グリーンの心こそ、絶対愛の探求者 Smith のそれではないか。筆者は、こゝにグリーンの、いつもの逆説的な多義性あるいはあいまいさを見る。小説に即して言えば、Smith は静かに消えていくが、Magiot のたましいの内に、Smith がひそかに生れようとしているのである。

ついで、最も多い嘘と、些少の真実をふくんでいるのが二人の典型的コメディアン「私」と Jones である。Jones の死後、「私」のゆめにあらわれた彼の最期のありさまは、何を語っているだろうか。

“700回目の喜劇を演じたあと、”もう Jones は人を笑わせる才智もかれがれに、荒地に横たわって死んでいく。それは、首都乗っ取りの功名心にはやり、ゲリラ隊指揮という生涯最後の野心劇に手をつけ、もろくも敗れ果てた絶望の終幕である。黒人隊長フィリポらを最後の最後



まで、正義と忠誠のマスクでたぶらかした Jones は、しかし憎めない男であった。彼の、天衣無縫のハッターは、やがて戦蹟に彼自身の銅像さえも立たせた。しかしながら、それは、結局彼のかきずいてきた放らつた Tart 哲学のかなしい証の記念碑となったにすぎない。

“我々、ながれ者の淫売族(Tarts)は、もうけを追って、ちょいちょい乗り過ぎをやらかすんだ” そして今、困ばいした Jones は、わが身をとる巻く荒涼たる岩石を見やりつゝ、とおきのセリフを言い尽してしまう、“此処は、けっこうな場所だ”と。すると“聴衆が、どっと笑う、なみだが出るほどに” 犯してきた数々の悪行と、また一朝にして飛びちった栄光のゆめの果てに、コメディアン Jones がだどりついた安住の地は、さくばくたる荒野という、けっこうな死に場所であった。Magiot は死の関門をくぐって“崇高なる偉人の陳列に加わった”が、Jones は自嘲の笑いをあげて、死という巨大な虚無の穴に呑みこまれていく。行くところ人を楽しませる天与の機知を発散したが、彼の存在は、見えない所で果肉の芯を腐らすうじ虫のように、虚妄に侵されていた。それは「私」とて同じである。共に荒野に横たわって息絶えていく友 Jones をかたわらに見た「私」は、そこに自己自身の滅びいく姿を目撃したのである。“我々（「私」と情婦マーサ）は、共同埋葬された二つの死体のように、やしの木の下のかぼ地に寝た。....我々は、どちらも愛のために死ぬことは決してしないだろう。我々は悲しみ、そして別れ、そしてまた新しいのを見つけるだろう” 情事の場所は「私」には時おり墓場のように見えたのである。

Jones は、持ち前の無邪気さで没落の諸因を瀬戸際まで持ち越し、そして一挙に落ちていくが、一方「私」は没落を小刻みに意識裡に先取りしながら、除々に崩壊していく。“女の抱擁が激しければ、激しいほど、それは、愛は続かないということの、一層つよい証拠となる” かくて、Jones の死にならうように、「私」とマーサとの愛も死んでいった。“私は愛することができない——多くの人々も、またそうである....” 愛のために、あるいは主体の創造のためには、命を賭してでも実存にアンガージュする能力を、これら人生のコメディアン達は放棄した、あるいは獲得しようとしなかった。（Jones は命を賭したのではない。無責任の才知が、いやがる Jones を死のわなにひっかけて滅ぼしただけである。） Magiot は、“自分はピラトのように水で手を洗う（責任回避）よりは、むしろわが手を血でぬらしたい (Matthew 27, 24)” と書きのこした。それは、「私」への友情ある諫めのことばであった。それなら Smith は「私」にどんな言葉をのこしただろうか。“そのためには喜んで死ぬ覚悟がある” どんな信念のことばを。それは、あの時ミサ式上で、司祭の説教に応えた Smith の無言のことばではなかったか。

“Mr Smith shook his head sorrowfully; it was not a sermon which appealed to him. There was in it too much of the acidity of human passion.

I watched Philipot go up to the altar-rail to receive communion, followed by most of his little band. I wondered whether they had confessed their sins of violence to the priest; I doubted whether he had required of them a firm purpose of amendment.”

(ここで、司祭の説教に関連して、一言付記したいことは、現代において、ローマ・カトリック教会が“正義の戦争”として認めている戦争は無いということである。その判断は信徒個人に任せられている——あるカトリック神学者の教示による)

ついにコトバとならなかった Smith の言葉が、ひっそりと「私」の心にぬかった。それが Smith の参加である。そんなアンガージュマンが、あるだろうか。しかし、生存がはらむ政治もはるかに屈かぬ根源の二元性を見ぬいたのが、グリーン的人間像であった。“残酷は、異常なものではない。それは人生につきものだ。それは、まるでサーチ・ライトのように地点から地点へすべっていく。我々は、ほんのしばらくの間、それから逃れるだけだ”と作者は「私」に言わせている。

Magiot は、「私」にとって眼前にそびえる偉大な山であった。しかし、なおその上方には山をつゝみ、一切に光をそそぐ「天」があることを肌で感じていたのは、「私」と Jones ではなかったか。

‘I wish I’d seen more of them (Mr and Mrs Smith),’ Jones said. ‘There’s something about him....’ He added surprisingly, ‘He reminded me of my father. Not physically, I mean, but... well, a sort of goodness’.

‘Yes I know what you mean. I don’t remember my father’.

‘To tell you the truth my memory’s a bit dim too.’

‘Let’s say the father we would have liked to have.’

‘That’s it, old man, exactly. Don’t let your martini get warm. I always felt that Mr Smith and I had a bit in common. Horses out of the same stable.’

I listened with astonishment. What could a saint possibly have in common with a rogue?.....

虚無から実存に挑みかかるのではない、「本質」から実存へと、あたかも舞いおりのかのように働きかけるのが Smith の静かな参加であった。“聖書のような確信の印象を与える” Smith は、彼らにとって“俺たちも自分の親父に持ちたかった” なっかしい平和の人であった。<sup>ふるさと</sup>故郷の非在をかこつ寂しきコメディアン達の父親にである。

このようにして、アンガージュマンの物語“The Comedians”は、Smith を頂点とし、心理的な有機性をもって円錐形状に構築されて終る。無責任なコメディアン達でさえ、彼らなりのいき方で人生への関わりを示している、というより、それは、作家グリーンによって提出された参加の陰画(ネガ)と言うべきであろう。

(昭和43年8月17日受理)